

# Nara Women's University

## 高村光太郎ノート その十 -生活人としての詩人の系譜- -西行と光太郎と-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属中・高等学校 公開日: 2010-11-09 キーワード (Ja): 高村光太郎 キーワード (En): 作成者: 井田, 康子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/2327">http://hdl.handle.net/10935/2327</a>

# 高村光太郎ノート

その十

—生活人としての詩人の系譜—  
—西行と光太郎と—

井田康子

歌人としての光太郎は明星派の系譜の人である。詩人としては光太郎は独自の開眼をしたのであるから先人はない。「パリで成るフランス女性と語学の交換教授をする事になり、私はフランスの詩の暗誦によつて学んだ。ヴェルレーヌの「屋根の上に空あり」も其時初めて知つた。ポオドレエルには殊に驚いた。その美術批評を読む必要から彼のものを書き始めたのだが、此の自己全存在を擲つての作詩態度にひどく打たれた。曾て日本で見聞してゐた先輩詩人達の作詩態度とまるで違つてゐるのに気づいた。筆のさきや、才力や、感受性だけで美辞麗句を並べたり、感懐を述べたりしてゐる事のくだらなさを痛感した。詩とは听ういふものだとポオドレエルに見せられたやうに思つた」(詩の勉強)のであるから、日本に於ける先人はないといつてよい。光太郎に私淑する後人はあつても。「詩」のジャンルは明治以後のものではあるし、前述の光太郎の言からも、先人は考えられない。しかし、沢山の歌人、俳人のなかに、以つた型はないと断言しうるであらうか。今回は万葉集・古今和歌集・新古今和歌集の主なる歌人の中に求めてみた。

○万葉集の歌人と光太郎

率直に真情を歌つた万葉人の中には、光太郎と通う歌人もありげに思われるが実際にはどうであらうか。

歌聖柿本人麿を無視できないので、先ず掲げたが、光太郎はこの人の系譜ではない。荘重な調べ、巧みな勿体ぶつた構成と修辭。光太郎の詩にはない。宮廷歌人である人麿と、野の人で通した光太郎と、その作品が異質であるのは当然である。

然である。

「又、山の辺のあか人といふ人ありけり。哥にあやしく、たへなりけり。人丸は赤人がかみにたゝむ事かたく、あかひとは人まろがしもにたゝむことかたくなむありける。」であるから山辺赤人を考えてみる。

若の浦に潮満ち来れば鴻を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る

み吉野の象山の際の木末にはこども騒く鳥の声かも

ぬば玉の夜の更けゆけば久木生ふる清き河原に千鳥しばなく

これらの歌の素材の自然の占める重さ。絵画的で端正な美しさ。心象は形象化されている。これらの傾向は光太郎の詩に求めることはできない。

桜田へ鶴鳴きわたる年魚潟潮干にけらし鶴鳴き渡る

何所にか船泊てすらむ安礼の崎榜きたみ行きし棚無小舟

高市の黒人の歌の趣も光太郎の詩にはない。高橋虫脩は叙事的長歌、勿論論外といえよう。

「贖酒歌」はじめ、風流遊問の歌を作つた大伴旅人、貴族的な旅人はどうであらうか。寂寥、憂愁の逃避としての作歌。その風流と虚構と幻想とは心をとらえる。大宰府にあつては歌老と望郷と、そして亡妻思慕を歌つた純情旅人。

妹と来し鞍馬の崎を還るさに独りして見れば涕ぐましも

往くさには二人吾が見し此の崎を独り過ぐれば情悲しも

亡妻を思い涙する純情は、智恵子を思う光太郎と通うものがあるが、その思いかたの質は違ふ。

死しても智恵子は光太郎の心の中では生きていた。「亡き人に」には「あなた

はまだある其処にゐる／あなたは万物となつて私に満ちる」と書く。「もしも智恵子が」では智恵子といっしょの山居の生活を描き、「元素智恵子」の結びは「元素智恵子は今でもなほ／わたくしの肉に居てわたくしに笑ふ。」である。「智恵子は死んでよみがへり、／わたくしの肉に宿つてここに生き、」のであるから「山林孤棲と人のいふ／小さな山小屋の棚が裏に居て／ここを地上のメトロポールとひとり思ふ」の「メトロポール」の詩が生まれる。「裸形」「案内」「吹雪の夜の独白」と何時も智恵子の佛が生き生きと浮かび、夢までも楽しい「噴霧的な夢」となる。そして「智恵子と遊ぶ」のである。じめじめと涙することはない。

旅人の妻恋の情と、光太郎の智恵子思慕とはかくも違う。旅人は大宰府での妻との死別を嘆きあれほど望んでいた都に還れる喜びも妻亡き帰路は悲しく、「天平二年庚午冬十二月 大宰帥大伴卿 京に向ひて上道する時、作る歌五首」があり、そのうち二首は前に掲げた。帰郷すれば、さらに悲しみがこみあげる。「故郷の家に還り入りて、即ち作る歌三首」がある。

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり  
妹として二人作りしわが山簷は木高く繁くなりけるかも  
吾妹子が植ゑし梅の樹見るところ明せつつ涙し流る

家にも、庭にも、庭木にも、何を見ても妻の佛が浮かぶ。そして妻を思い、涙する。帰郷の喜びは歌われない。望郷の念が強く吐露されていただけ、望がかなって都に帰れた喜びは深いはずだが、喜びを分つ妻のいない事は耐えがたく、亡妻を思う心の方が強い純情の旅人。

涙する純情と、心の中に何時までも生かしておく純情。その真情を歌や詩に吐露する点は似ているが、傾向は違う。

人事詠の山上憶良。人生の現実を直視し、思想的な歌を作った人生派の歌人である。儒教思想の深い影響のうかがわれる思想的傾向をもつヒューマニスト。現実的であり、道徳的であり、子供を中心として家庭を愛し、父母を敬愛する極めて温かい人間であった。家、肉親への愛にとどまらず、「貧窮問答」の示すごとく庶民に温情を傾けた。役人として知った庶民の寒状の窮乏に深く同情したからこそ「貧窮問答」の貧者窮者の寒状―惨状であるが―はまざまざと描かれ、その深い嘆息が、読む者の心に迫るのである。庶民の苦悩に苦悶した温

情は永遠に生きている。

光太郎にも通じる面は、ヒューマニストであること、人間を、人生を直視して作品を書いたこと、偽らざる真情を吐露したことである。が、憶良の系譜とはいきれない何物かがある。

憶良は役人であった。高級官僚にはなり得なかったが、大宝元年正月遣唐少録として中国に渡り、靈龜二年には伯耆守、養老五年東宮侍講、天平初年筑前守となつてゐる。出世もしたいし、仕事もしたいし、子供も妻も可愛いし、だから貧も辛いし、いわゆる普通人の面を多く持った人であつたと思う。

士やも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして

富人の子どもの著る身なみくたし捨つらむ粗糲らはも

あらたへの布衣をだに著せがてにかくや歎かむせむすべをなみ

若ければ道行き知らじ幣は為む黄泉の使負ひて通らせ

など、有名な歌がそれを示している。光太郎は一生、自由人であり、在野であつた。素晴らしい会心の彫刻は作りたいた願うが、名譽や富は求めない。求めようとすれば、すぐ手のとどく所にあるのに、手を出そうともしない。だから、貧として「高村光太郎ノトその九」で書いたように「へんな貧」であり、類のない不思議な倫理的人間・芸術家の不思議な「貧」であり、憶良の歌つた現実的な辛い貧苦ではない。困窮となつてもその生活は苦しかったからこそ庶民の窮には理解深く同情したからこそ「貧窮問答歌」が生まれ、「老身重病年を経て辛苦す、及び兒等を思ふ歌七首」が老年に書かれるのである。「……老いてある わが身の上に／病をと／加へてあれば／屋はも／嘆かひ群らし／夜はも／息衝きあかし／年長く／病みし渡れば／月累ね／憂へ吟ひ／こととは／死ななと思へど／五月蠅なす／騒ぐ兒どもを／打棄てては／死は知らず……」思ひわづらひ／哭のみし泣かゆ」と死ぬ気持にさえなれぬ追いつめられた心情のべ、反歌六首の中に貧と子供を思う前述(2)(3)の歌が、又「術も無く苦しうあれは出で走り去ななと思へど兒らに障りぬ」の歌が書かれるので、憶良にとつて「貧」は現実的な辛いものであり、それゆえにこそ一層子供への愛は強くなつたのである。

憶良の妻への愛は「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむぞ」となる。光太郎は「智恵子抄」で真情をぶちまける。憶良の隠やかさ、

常識的な詩をふみこえぬつまじさ。光太郎のヴェルハーレン的な情熱、当時の日本としては大胆な表出。やはり違ふ。

子への愛は自身の子を持った憶良と、実子を持たなかった光太郎とは当然違ふ。「子等を思う歌」でも「老身重病年を経て辛苦す、及び兒等を思ふ歌七首」でも「男子名は古日を恋ふる歌三首」でも憶良の親馬鹿に近い痛切な真情がこめられている。光太郎は詩集「をちさんの詩」などに子供に対する愛情がこめられているが、憶良のような盲目的な愛情はうかがえない。

俗情を顧慮せず、純粋な俗情を詠む憶良、俗情にまどわされることなく独自の境地をあからさまに書く光太郎。憶良の系譜とはいえない。

家持はどうであろうか。武人大伴家の部族の長としての「海行かば」のような歌はさておき、たをやめぶりへと傾く家持、頽廢の美すら感じさせるその歌

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも  
わが屋戸のいささ群竹吹く風のかそけきこの夕かも  
うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば

このような趣を光太郎の詩の中に見つけだすことはできない。繊細な、優雅な、感傷的な、美しさは光太郎の詩にはない。

家持は相聞の歌も沢山詠んでいるが、光太郎のようにひたむきに「智恵子」一人にしぼったのではなく、妻・坂上大嬢への熱烈な相聞歌のほか、他の女性への多彩な相聞歌や挽歌がある。

田辺福麿呂、笠金村、等々あげて比較すべき歌人はあるが、取り上げるまでもないように思うので割愛する。なほ、額田王、坂上郎女など一流の女流歌人も取り上げなかった。割愛した歌人の中に、まだまだ検討の余地はあろうが、今回は主なる男性歌人に限ってみた。

○古今和歌集の歌人と光太郎

古今和歌集は、定家の貞応本では千百首、愚滅歌十一首、(重出のものをとると十首)の歌がのせられている。歌数の多い順にあげると、紀貫之百二首、

凡河内躬恒六十首、紀友則四十六首、素性法師三十六首、壬生忠岑三十五首、

在原業平三十首、伊勢二十二首、藤原敏行十九首、小野小町十八首、清原深養

父十七首、僧正遍昭十七首、藤原興風十七首となる。撰者の貫之、友則、躬恒、

忠岑の歌を合すると、全体の二十二名をしめる。それで、撰者をまずあげねばならないだろうし、さらに歌仙に数えられる僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、

僧喜撰、小野小町も考えねばならぬかもしれない。しかし一人一人当ってみるまでもなく、古今調がどういふ調べを持つていのかを考えることで片づくように思う。歌仙を含む読人知らずの歌を中心とする前期の調べ、撰者を中心とする後期の調べとは全く同一とはいえないが、全体として、感情を率直に歌うのではなく、婉曲に、優雅に、機知をもって表現し、優美都雅、理知的な技巧美を最上とする趣の歌といつてよいのではないか。藤原俊成の「理つよし・をか

し・ありがたし」といふ評の古今の歌。万葉のますらをぶりに対してたをやめぶりといわれる歌の姿、掛詞・縁語などの修辞技巧、人生的な歌でないこと、等等を考えると光太郎の詩とは縁が遠いと思われる。人生を直視して真剣に詩をかいた光太郎のどの詩を思い浮かべても古今の調は見出せないように思う。

念のため撰者の歌をあげてみよう。六歌仙のうち業平と小町のも。  
袖ひちてむすびし水のこほれるを春立けふの風やとくらむ 貫之  
やどりして春の山べにわたる夜は夢の内にも花ぞちりける 躬恒

春の夜のやみはあやなしむめの花色こそみえぬかやはかくるる 躬恒  
心あてにおらばやおらんはつしものおきまどはせる白菊の花 友則

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ 友則  
たがための錦なればか秋ぎりのさはの山べをたちかくすらむ 忠岑

はるきぬと人はいへども鶯のなかわかぎりはあらじとぞ思ふ 忠岑  
久方の月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらむ 業平

月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我身ひとつはもとの身にして 業平  
ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな 小町

思ひつつぬればや人のみえつらん夢と知りせばさめざらましを 小町  
いろみえでうつるふものは世の中の人このころの花にぞありける

○新古今和歌集の歌人と光太郎

新古今和歌集の歌は一番芸術的に、美的に、詠むというより構成してあると思う。余情妖艶の体を重んじる象徴主義、ひたすら幽玄の美を求めて、巧緻な

技巧を駆使する。幽玄、有心、ある意味で最高に洗練された美を歌に表現した。

体言止、本歌取、句切れ等々、修辭のすべては巧みに幽玄の美を醸成する。如何に苦心して作ったか、いろいろのエピソードが伝えられている。

光太郎は美を求める心が強かった。「美に生きる」に

一人の女性の愛に清められて

私はやつと自己を得た。

言はうやうなき窮乏をつづけながら

私はもう一度美の世界にとびこんだ。

生來の離群性は

私を個の鍛冶に専念せしめて、

世上の葛藤にうとからしめた。

政治も経済も社会運動そのものさへも、

影のやうにしか見えなかつた。

智恵子と私とただ二人で

人に知られぬ生活を戦ひつづ

都會のまんなかへ蝸居した。

二人で築いた夢のかずかずは

みんな内の世界のものばかり。

検討するのも内部生命

蓄積するのも内部財宝。

私は美の強い腕に誘導せられて

ひたすら彫刻の道に骨身をけつづた。

とあり、「手紙に添へて」には「世界は不思議に満ちた精密機械の仕事場／あなたの足に未見の美を踏まずには歩けません／何にも生きる意味の無い時でさへ／この美はあなたを引きとめるでせう／たつた一度何かを新しく見てください／あなたの心に美がのりうつると／あなたの眼は時間の真空間の外をも見ます／どんなに切なく辛く悲しい日にも／この美はあなたの味方になります／仮りの身がしんじつの身になります」と、自分の体験をもとにしたような詩句がある。智恵子と一緒の窮乏の日も、智恵子の病氣の日も、死別後も、切なく悲しい時にも美は光太郎の味方であり、時間の裏、空間の外をも見、しんじつの生活をしていたからこそ、この詩が生まれ、人の心をうつのである。

「ばけもの屋敷」でも「主人はただ蝸居の美に生きた。」と書く。美の追求者であり、美の獲得者であり、美の表現者であった光太郎。「美」を離れては、光太郎は考えられない。

「美を見る者」には「この世の美からは逃げられない。／首をかけても、／この世の美からはどかれぬ。」と書く。詩を書くことが不可避であるごとく、美からも不可避なのである。戦争詩の中にさえ「美」は書かれる。「美しきものわれらの天地に満ち。／天に春夏秋冬の次第あり、／地に山林清泉の潤沢あり、／われらが伝統世々その美を濟す。／されば美は皇國の精髓にして／一億の十気これによつて昂る。／われら愈烈しき戦の日に美をすてず、／夜を日につぎて勤勞の汗にまみるる時、／國民悉く非常措置に座を蹴つて起つ時、／日本の美きよらかにして高き力となり、／われら美を負ひて戦ふ。……」（美をすてず）と。

「美は到るところに在る。美は又到るところに創り得る。」という言葉にあらる考え方が、その詩の到る所に表出されているのであるが、「到るところに創り得る」は芸術至上主義・唯美主義・耽美主義というものと光太郎は結びつけていない。「事物のありのままの中に美は存するのである。美は向うにあるのではなく、こちらにあるのである。」ので、美は到る所、ありのままの中に客観的に存在するが、それはこちらが主観的にとらえて、はじめて「美」の存在がはっきりかにされるのである。主体的な美の把握によって、普遍在の「美」は「美」としての存在を得るのであると光太郎は考える。だから「美の力とは結局美を認める力である。美は決して客観界に独り離れて存在して居ない。それゆゑ美を認める力の無い時、この世に美は存在しない。」と書くのであり、「美」を創るとは「美」を認めることなのである。芸術至上主義とか、唯美主義・耽美主義とかは、光太郎としてはとらないのである。

光太郎は「自分の芸術は自分である。自己の人生観・世界観の歩みからのみ発足するものである。詩はほんとの「生」から生まれる。」との詩観に基づいて詩を書く。「詩の本質は、その詩全体が人を打つて来る不可避不可抗の感動力であつて、」と詩の本質を規定する。人間の真情——人間の心の奥の真実の声、詩精神によって詩は生まれる、不可避に生まれるものであると思う光太郎の詩が、唯美的に唯美的には作られるはずがない。「詩はほんとの「生」から生

まれる」と思うからこそ、「自然に深く根ざし、自己の内に此の人類の絶えな  
い泉の意味を明らかに強く感得した芸術家の芸術だからこそよいのである。此  
が芸術の価値の根本義である。」のことばとなるのである。美のための構築に  
よるのではなく、自然と不可避に詩は生まれるのである。「己は己だ」であり、  
「己の通りな芸術を作る」のである。光太郎の心をくぐると、あたり前の事が、  
新鮮な美をもたらす。「当然事」のような詩まで書かれる。

「詩とは文字ではない、言葉である。／言葉とはロゴスではない。／アクト  
である。」と。「生」と「アクト」ここに光太郎の詩の秘密がある。「生活人」  
として詩を書いた光太郎には、いわゆる審美家としての詩のないことが、これ  
ではつきりする。

新古今和歌集の歌人には審美家として歌を詠んだ人が多い。新古今代表歌人  
の一人藤原俊成の

春の夜は併ばの梅をもる月の光も旅る心ちこそすれ  
夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里  
の歌の幽玄美。

同じく藤原定家の

梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞ争ふ

見たせば花もみちもなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

の歌の有心の美。この二大審美歌人の歌の趣、歌の俤は、当然光太郎の詩には  
見られない。この二人は新古今調の代表者。

俊成はひたすら幽玄の美を求めた。新古今集の撰者の一人で、俊成の子、定  
家は俊成の幽玄をさらに発展させ、有心を重んじた。伝統としていわれている  
心有る歌、真情やまことのある歌で、余情があり、妖艶美のある歌を詠んだ。  
巧緻妖艶すぎて、後鳥羽院が、定家の歌はすぐれているが心有る歌ではないと  
仰せられるような歌風である。

この二人で代表される余情を重んじる象徴主義の歌は、芸術的に巧緻を極め  
るようになり、体言止、本歌取、句切れなどなどで技巧がこらされる。

定家以外の撰者・源通具・藤原有家・藤原家隆・藤原雅経等それぞれに特徴  
はあるものの、大すじでは、俊成又は定家の風に近いから、割愛する。

新古今和歌集選進の院宣をお下しになった後鳥羽院、隠岐で切り継ぎをなさ

れ隠岐本をのこされ、親撰とさえいわれているし、すばらしい御歌を沢山にお詠  
みになっている後鳥羽院の御歌風は俊成風に近い。後鳥羽院は俊成や西行の歌  
風を重じておられる。入集歌の多い慈鎮・藤原良経・式子内親王、初め選者で  
あり、早くなくなった寂蓮等々、注目すべき歌人は多々あるが、新古今調を醸  
成する歌人ばかりである。光太郎とは違い。

新古今調醸成に大役を果たしながら、新古今の他の歌人と肌合の異なる人が一  
人ある。それは西行である。生活人の歌を作った異色の歌人。生活人の内容は  
光太郎と西行とは違いますが、その作歌・作詩の態度は相通うものが見出される。  
光太郎はあくまで「ほんとうの生」と「美」を追求する生活人であった。光  
太郎の詩は光太郎の生活が鮮やかに書かれている。西行も生活に即した歌を詠  
み、生活の断片が生き生きと歌に表出されている。西行は自然を愛し自然に没  
り自然を詠んだが、自然を描写したのではない。自然を通して、自分の偽らざ  
る感情を吐露したのである。

春になる桜の枝は何となく花なけれどもむつまじきかな  
物思ふ心のたけぞ知られぬ夜な夜な月を眺めあかして

この歌と前掲の赤人の歌を比較してみれば一目瞭然である。生得の歌人西行は  
俗を離れながら、人間を離れなかった。だからこそ生活人の歌を作ったのだ。

光太郎は離群性を持ちながら、光太郎にひかれ、寄ってくる人を決定的に拒  
みはしなかった。自由人として束縛を受けぬ限りにおいて。

草野心平の詩「高村光太郎」の中に

ある人は隠棲といひ。

本人は「生来の離群性はなおりそうもないが」という。

半分はそうであり半分はそうでない。

公民館。図書館。音楽堂。(も村に欲しい。)電気も村の自家発電。

ホームスパンや酪農もすすめたりする。小学校の演壇にもたつたりする。

やがては「世界の人等と短波をかわして」ポランの広場にしたいと思う。  
メトロポールにしたいと思う。

離群性も持ち前の性格だったが。

連帯性も持ち前の性格だった。  
独居自炊。

人間と人間との可能性が光太郎のなかに渦巻く。

とある。お互に心の通いあった心平には光太郎の人間像が的確に把握されている。光太郎を「わが光太郎」と愛し、光太郎の詩を愛した心平が真実の「光太郎像」を詩にした「高村光太郎」は間違いないと思う。詩と作品と写真を通してしか知らぬ私も実際心平の詩のようなイメージを持っている。とすると、離群であつて離群でない二面性、いわゆる人間らしい矛盾を示す。心平は「光太郎の再評価」で「光太郎の詩は、そのほとんどの場合にも人間が顔を出す。顔をかくすことは全くないといつていいほど詩と作品は一如である。つまりいつてもその詩には人間存在が背景にある。」という。光太郎ほど人間くさい人間——俗臭はない——はないと思う。どの詩を見ても光太郎の人間がいきいきと語られている。こう見てくると僧西行と彫刻家詩人の光太郎と、人として通うものがあるように思われる。そして生活に即して作品を書くという根本態度は同じといつてもよいのではなからうか。

春の夜の夢の浮橋とだえて案に別るる横雲の空

定家

春風の花をちらすと見る夢は覚めても胸のさわぐなりけり

西行

右の歌を比較して見れば、審美家と生活人との歌の差がくつきり浮かぶ。春の夜の夢がさめた時歌人の感慨は、構築した美の世界に遊ぶか、素朴な自分の情感をそのまま正直に述べるか、によつてかくも歌境は違ふ。

「彼は歌の世界に、人間孤独の理念を新たに導き入れ、これを縦横に歌った人である。孤独は、西行の言わば生得の宝であつて、出家も遁世も、これを護持する為に便利だった生活の様式に過ぎなかつたと言つても過言ではないと思う。」と小林秀雄はその「西行」で書いているが、光太郎の離群性と通うのではなからうか。

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ

花も散り人も都にかへりなば山寂しくもならむとすらむ

寂しさに堪へたる人の又もあれな庵ならむ冬冬山里

俗と離れながら人を意識するのは、それだけ「人間孤独」の思いを切実にしていたのであり、それをさまざまにかくすことなく折にふれ歌つた

のだ。離群性と自認する光太郎の意識は人間を離れないからで、やはり孤独をかみしめていたのだと思う。

孤坐

物すこい深夜の土砂降りが家をかこむ

鼠も居ない落莫の室にひとり坐つて

彫りかけの木彫りの鯉を押へてゐる

掌は鱗にふれて不思議につめたたく

そこらの四限にそこはかとなぐ

身に迫るものがつまつて来る

鯉の眼は私を見てゐる

私は手を離さず息をこらし

夏の夜ふけの土砂降りに耳を傾ける

どこか遠い土地に居るやうな気がする

現世でないやうな気がして来る

智恵子はゼームス坂病院に入院中、文字通りアトリエにたったひとり、鯉を彫っていたのである。人は勿論、鼠すら音もさせぬ孤独。駒込林町のがらんとしたアトリエの土砂降りの夜。「ばけもの屋敷」「お化屋敷の夜」のあのアトリエ。「独居自炊」の舞台なるアトリエ。その孤独の生活を書く詩に、感傷性をにじませないだけ、一層人の心をゆるする。偽りのない真実の生活が鮮やかに浮き彫りにされているからである。西行の歌が偽らざる心の告白であると同じように、光太郎の心がそこにある。

光太郎の「独居」にはじまる離群の生活は、終戦後の太田村山口の自己流論の山居に極まる。「人生飢餓」の「雪女はつひに出ない。／雪はふぶいて小屋をゆすり、／雪片ほしいまに頬をうつ。／彫刻家は炉辺に孤坐して大火を焚き、／わづかに人体飢餓の心に堪へる。／強迫は天地にみちる。」とさすがに彫刻家としての苦痛をうったえる独居である。「山荒れる」もまた、「孤坐」の土砂降りどころではない凄さ。「山はもみくちやに縋毛立ち、土砂降りの底に小屋がある。／畑は川だし、井戸はうなる。……太田村字山口のみじめな果に／空風火水が今日は荒れる。／嵐は四元に解放せられ、／嵐はおれを四元にかへす。」と自然の重圧下の孤坐である。「今日も愚直な雪がふり、／小屋は

つんぼのやうに黙りこむ。／小屋にゐるのは一つの典型、／一つの愚劣な典型だ。」(典型)と自己批判をする光太郎。孤独と内省は縁が深い。西行もまた内省的であった。小林秀雄はいう、「心理の上の遊戯を交えず、理性による烈しく苦がい内省が、そのまま直かに放胆な歌となって現れようとは、彼以前の何人も考え及ばぬところであった。」と。

ましてまして悟る思いははかならじ吾が歎きをばわれ知るなれば

まどひきてさとりうべくもなかりつる心を知るは心なりけり

心から心に物を思はせて身を苦しむる我身なりけり

如何に心をつめていたか、痛いほどわかる。

「高村さんは常に独りの人だった。この自由を守るためには何物とも妥協しなかつた。……世の中で、たつた自分ひとり、掛け値も見栄もなく、取組みあへる対象が「仕事」と「愛」と「反省思索」の外にあるか？高村光太郎の一生はこれであつた。一と高田博厚のいうごとく、孤独、自由の人であり、詩壇にも影刻界にも同時代者との交渉を積極的に持たなかつた。「いまから二十年前『中央公論』が時の有為の詩人の作品をあつめるため、私に指名をもとめた時に先ず高村光太郎をすいせんした。しかし光太郎は『中央公論』のような大雑誌には詩は掲せたくないと断つた。そして、かれは名もない同人雑誌から頼まれた詩はこくめに書いて、同人費に該当する金を為替に組んで送りとどけていた。かれはそんな事に純潔を感じ喜びをおぼえ、さっぱりしたい気分を感じていたのだ。云々」(我が愛する詩人の伝記)と原星は書く。中央詩壇、いな文壇にあえて進出しなかつた光太郎の佛を端的に物語っている。それでいて、同時代者の注目を何時も一身に集めていた。誰も無視できなかったのである。

西行も出家の身として、歌人群の埒外にあつたものと思われる。しかし新古今和歌集撰進に当っては西行の歌の入集は九十四首を数え、最も多いのである。尾山篤二郎、川田順などの研究によれば、西行の歌友は、待賢門院の女房たち、大原の三寂、藤原俊成とその周辺が主で、当時の宮廷歌壇に勢力のあつた六条藤原家とは交渉がすくなかつた。俊成には、西行が晩年自撰の歌を各三十六首の歌合にした御裳溜河歌合の判を請うているし、又宮河歌合を定家に判を請うている。そこで、俊成門下及びその子の定家によって撰ぜられた新古今和歌集

には多数入集したのである。それに新古今和歌集の中心であらせられた後鳥羽院は非常に西行を高く評価しておられた。

西行の歌仲間が前述のように少数であつたが、親密であつた。そして俊成をめぐる若い寂蓮や藤原隆信、慈円などとの間に歌がかわされるようになったが、光太郎が「私は概して時代の老大家よりも真摯な青年層の方から良い教訓をうける。……葉舟、原星、朔太郎、耿之介、柳虹等の諸氏は常に尊敬してゐた。

千家元廣、佐藤勲之助、宮崎丈二、福士幸次郎等の諸氏からも多く教えられ、又後もつと年若い友、尾崎喜八、高田博厚、片山敏彦、高橋元吉等の諸氏と親しくなるやうになつて大に啓発された。……後から来るものに教はる方が先人に教へられるよりも大きい。先人の教は凡そ筋が分つてゐる。未来の人の教は無限であり、発見である。其後もつと若い友、草野心平、黄瀬、坂本遼、岡本潤の諸氏からも強い刺激をうけ、其他列挙しきれない程多くの詩人からそれぞれ良いものを教はつてゐる。殊に宮沢賢治の如き稀有の詩人を知つた事は最大の喜であつた。」(詩の勉強)と書いたことを思い合わせる事ができる。

西行の歌人としての声価はその老年になつてから高まり、新古今撰集時代には歌聖としての待遇を受けている。光太郎は洋行帰りとして青年時代からその詩が有名になり、「道程」が大正三年刊行され、注目を浴び、一流詩人としての地位は確立したので、この点は少し違ふ。

西行は二十三才の時出家し、——その原因はいろいろ研究されているが、決定的な説が出る段階ではない、俗界を離れてその生活の詳細の不明なため、憧憬の理想のなかで描き上げられ、花と月を友とした悟りすました歌聖にまつり上げられ、かつ、フィクションによつて潤色を重ねられ、西行物語絵巻なども鎌倉時代に盛んに作られた。生前から伝説も生まれたようであるが、「古今著聞集」「撰集抄」のような仮託の説話集にまで記事がある。謡曲の「雨月」「西行桜」「遊行柳」「江口」などの存在も西行の声価のあらわれである。光太郎もその没後、劇に映画に小説にブームを巻き起したことは記憶に新しい。「光太郎の死後、あらゆる統物娯楽と演出演劇がよつてたかつて、光太郎と智恵子をめちゃくちゃに見せ物にしてしまった。劇ではひげの生えた光太郎と智恵子とが恋を物語り、恥かしい場面を転換した。映画では見るのにしびないかれらの恋愛が、演出された。ラジオもまたそういう愚劣をくりかえした。小説物



語も(佐藤春夫の「小説智恵子抄」は含まない)また光太郎を引きすすえて怪い書生流の恋愛道中を点出した。かれらは何が面白かったのだ。なんのウラミがあつたのだ、なにを世間から受けさせるつもりで空騒ぎしたのだ。私はそれらの記述を新聞雑誌で読むごとに、うたた暗然として、聖人高村光太郎のために、いつも、こいつも叩きのめしてやろうかとさえ憤激一日として安きを得なかつた。その生涯の大きさと正実とをくしくも理想として抱いていたかれは、過失なくその大きさと逞しさ、その上に、こまかい鋭い人格完成をなしたげたのであるが、見世物の群衆はどんなわけからか彼の周囲に集まり、わいわい騒いだのであろうと私は思った。それは死んだ妻を恋うという一つの日本人が控え目にしていた現われを、光太郎は最後まで隠さなかつたからであつた。われわれ日本人は妻との情事はいつも死後も、これを草ふかき土中にうずめて悲しんでいた。ひとの前で語るべきではないという太極の上に立っていた。」と犀屋は書く。軽薄で興味本位の世相の反映が空騒ぎにあることは論をまたない。その上にいわせて貰うならば、詩に彫刻に輝かしい業績をあげたからこそ、世間は騒いだのである。こういう面も、あらわれ方は異なるが似ている。

「西行はおもしろくてしかもところに殊にふかくあはれる、ありがたく、出来しがたきかたもとに相兼てみゆ。生得の歌人とおほゆ。これによりて、おほろけの人のまねびなどすべき歌にあらず。不可説の上手なり」と歌人後鳥羽院は御口伝で、最上級の讃辞を与えておられる。「私にとつてはほとんど生涯の詩の好敵手であつた」という詩人犀屋は「かれは日本の詩というものは、昇れるだけ昇りつづけた男であつた。」と讃辞を擡げている。同じく歌人・詩人とそれぞれをよく知るものによつて最高の讃辞を得ている点も似ている。表現のことはどうであらうか。

西行は俗語的発想も少くなく、専門歌人的な類型的な読み方をしなかつた点も注目しなければならぬ。素材・用語ともに自由な広がりを持っている。

竹馬を杖にもけふはたのむかなわらは遊びをおもひでつづ

(A)

むかしせしかくれ遊びになりなばやかたすみもとによりふせりつづ

(B)

西行は武士の出であるから専門歌人のような王朝的な和歌の伝統を身につけなければならぬことはなかつたので、自分自身の生き方から生じる切実な感想を、日常的題材で、そのまま平俗な日常語で表わしたのである。順徳院が「ただ詞かざらずして、ふつふつといひたるがききよきなり」と評しておられる通り

りなのである。

光太郎も生きた言葉、それが詩語であるという。「五臓六腑のどきどきとあこがれとが訴へたいから／中身だけつままで出せる詩を書くのだ。／詩が生きた言葉を求めるから／文ある借衣を敬遠するのだ。」と「当然事」に書く。

「詩は眞の言語活動で書かれねばならぬ。衣を剥けば日常語即詩語である。詩は言葉の裸身である。」とも書く。これらの表現と内容はそっくり西行にもあてはまる。光太郎は「人のしやべる言葉をそのまま描出したところで、それは単なる模写に過ぎない。そのしやべる言葉の中から本能的に生きた言葉の語感を感じる事から始まるのである。其処に無限の深さとの確実とが生れる。其処に新鮮極まる詩が伏在する。」ともいう。そして「どんなに傷だらけでも出来るだけ今日の言葉に近い表現で詩を書かうと思つた。」と書く。そこで日常語、俗語、みな光太郎の手をくぐると磨かれて詩語となつてしまふ。

大きな囀

植木屋さんが大きな囀をする。

三階の屋根うらで聞いてみると、

午前十時のあかるい冬の朝日が

もうがらんだの植木屋さんの広い庭に

霜よけの葎簾の影をちらちらさせてゐる中で

こだまする程大きな囀がかあんとひびく。

植木屋さんは口ぐせに

「畜生」とあとでいふ。

植木屋さんはもう鞋をはいて

松の手入れで梯子の上のつてゐる。

さうして時々かあんと大きな囀をする。

しづかな、かうかうと晴れた日だ。

「畜生」などというキタナイ言い草まで、生きてゐる。「丸善工場の女工達」

「はげもの屋敷」など、日常会話がいきいきと描出されている。

子供への関心も二人とも深い。西行物語絵巻によると、「……秋もまたのかれてこのくれの出家さはり無とけさせ給へと三宝に祈請申てやとへと帰ゆくほとにとし比たえがたくいとをしかりし四歳なる女子えんにいてむかひて父のき

たるかうれしきよとそてにとりつきたるをたくひなくいとをしくめもくれておはえけれともこれこそは煩惱のきつなとおもひて縁よりしもへけをとしたりければなきかなしみけれともみゝにもきゝいれずして中に入ぬ」(詞書第一段)とあり、実子への深い愛を物語る。

うなる子がすさみに鳴らす麦笛の声におどろく夏の昼臥し

石なごの玉の落ち来るほどなさに過ぐる月日は変はりやはする

我もさぞ庭のいさごの土遊びさて生ひたてる身にこそありけれ

入相のおとのみならず山ではふみよむ声もあはれなりけり

篠ためて雀弓はる男のわらはひたひまほしのほしげなるかな

西行七十、七十一才の作で十三首連作、題は「嵯峨に住みけるに、たはぶれ歌とて人々よみけるを」で、その中、二首は(A)(B)で挙げ、ここに五首掲げた。身辺の日常的な素材を平俗なことばで表現したものであるが、西行の幼時への追懐もさることながら、子供へのあたたかい眼が感じられる。

光太郎には実子はなかつたが、「をぢさんの詩」という詩集さえある。序に「この詩集は年わかき人々への小父さんからのおくりものである。小父さんは以前から童謡といふものを書かず、小さい人々にむかつてさへ听ういふ詩を書いていた。小父さんは自分自身の感激をそのまま、幼い人々や、男女青少年の方々にむかつて、自分自身の言葉でのべるより外の方法を知らなかつた。年とつた小父さんのいふことを、團伊真端でもきくつもりで読んでください。」(後略)と、子供への深い愛情がこめられている。

この小父さんはぶきようで

少年の声いろがまづいから

うまい文句やかはゆい唄で

みんなをうれしがらせるわけにはゆかない。

そこでお説教を一つやると為よう。

みんな集つてほん気できけよ。

まづ第一に毎朝起きたら

あの高い天を見たまへ。

お天気なら太陽、雨なら雲のゐる処だ。

あそこがみんなの命のもとだ。

いつでもみんなを見てあてくれるお先祖さまだ。  
あの天のやうに行動する、  
これがそもそも第一課だ。

えらい人や名高い人にならうとは決してするな。

持つて生まれたものを深くさぐつて強く引き出す人になるんだ。

天からうけたものを天にむくいる人になるんだ。

それが自然と此の世の役に立つ。

窓の前のバラの新芽を吹いている風が、  
ほら、小父さんの言ふ通りだといつてゐる。(少年に与ふ)

微笑ましい善意にみちた光太郎らしいお説教である。「をぢさんの詩」以後にも「春の一年生」「ばくも飛ぶ」「少年飛行兵」「少年飛行兵の夢」「少女戦ふ」「たのしい少女」「ほんとの力」「大東亜の子ども達よ」など書いているし、「青年」「純潔」「青春のうた」等、青年を深く愛する心を述べている。俗人的な物や名譽欲については、どちらも淡々としている。西行が頼朝から貰った銀の猫をすく門前の童にやってしまったという香妻鏡にある逸話。光太郎が展覧会に作品を出さず、昭和二十三年十月帝國芸術院会員に推されたが辞退したこと。相通じるものが感じられる。

西行は晩年まで、とにかく一生歌を作った。そして七十三才で二月十六日に死んだ。念願通りに。

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

光太郎も昭和三十年十二月十九日に「生命の大河」を書き、翌三十一年四月二日、七十三年の生涯を閉じた。明治四十年の明星五月号に「秒刻」をのせて以来、一生詩を書いた。この点も似ている。

二人とも生活からにじみでる和歌や詩であるから、生活のあるかぎり、その創作はつづくのである。作品には、人間が、西行や光太郎の人間がにじみ出ていて、生き生きとして人の心に迫る。生き方は違つてはいるが、「生」ある人間がまざまざと表出され、魅力がある。出家で歌人、彫刻家で詩人、たしかに生き方は違つているが、その倫理性の点では又似ている。

小林秀雄は「天原の倫理性と人生無常に関する沈痛な信念」を西行にみた。ヒューマニスト、モラリスト光太郎、だからこそ犀屋も「巨大豪放の透明感と

いうもの、清純高潔の生き方というものを最後まで持ちつづけたかれ」とか「高村の生きたあとのかくそや悲しみを見ると、聖人ということばがはじめてその顔をちらりと見せたことに気づく、このばかばかしいことばが何と近い仲間のおいだに存在していたことだろう。」と「我が愛する詩人の伝記」に書く。

聖人光太郎の極付がつく倫理的人間なのである。「高村光太郎その人は、先天的に、また本能的に、ヒューマニスティックな、そして求道的なものを身につけて生れてきた人だと思われぬ」と奥平英雄は「晩年の高村光太郎」にいう。「ヒューマニストといふモラリストといふ、どつちも愛の世界のなかでの現象ではあるが、矢張り大分ちがう。ヒューマニストでありまたモラリストであるという氏のような存在は稀である。氏の詩が倫理的な堅い冷たい光を発するのは氏のモラリストからきている。それは表現技術までにも影響している程強力なものである。……モラリストは真実に徹しようとする。従つて奥雑物や空明気は必要でなく、物のまんなかにはいろうとする。中心をつかめば余分は要らないとする。この傾向は氏の詩の表現方法にも直接現われている。」（光太郎の詩業）と草野心平は書く。「この詩（刃物を研ぐ人）をよむと、詩そのものの中から一人の求道者風なひとの姿が浮かんでくるが、そのように高村光太郎の美意識や人生的態度には、どことなくストイックな求道者風なところがあった。そしてここで研かれるのは刃物であり美の意識であり、そしてまた高村光太郎の芸術意欲であり人生的理念であった。」と伊藤信吉は鑑賞に書く。光太郎は「『草の葉』の詩としての価値はホイットマンの人間としての価値だ。『草の葉』は詩でないと考えてゐる人は、詩術と詩とについて再考せねばなるまい」（ホイットマンの事）と書き、人道的詩人の立場を明らかにしている。ホイットマンを論ずることを通して、光太郎がヒューマニストでモラリストであるということについては研究が沢山書かれているので、この辺で、それに譲る。

人生にも自然にも愛執深い出家西行。愛執は悟りの障害であることを知りながらたつことが出来ず、月や花の眺めを通して心を語る西行。彫刻の安全弁として詩を作り心を語る光太郎。一すじでありながら、ゆれ動くところがあり、そこに人間らしさが感じられる。

生得の歌人といわれる西行は、歌の推敲はしなかつたのではないかと思われ

る歌が多く、名歌ばかりともいえない。光太郎は不可避に詩をかく、やはり天成の詩人である。光太郎にあっては推敲もしたし、しない場合もあった。この点については「高村光太郎ノートその五詩稿検討」でふれたので、ここでは書かない。

旅。西行にあっては大きなウェイトをもつ。草庵生活と旅と、月と花と。こゝもまたわれ住み憂くて浮かれなば松はひとりにならむとすらむ。

しかし、一生浮浪の旅をしてはいたわけではない。

光太郎は、米、英、仏と大きな旅をした。西行と違ふ芸術修業のための、文化吸収のためのものであった。この旅で得たもの、そしてその開眼は光太郎の一生を決定した。とすると、光太郎にとつても旅は大きなウェイトを持っている。

英の追求はどうであらうか。光太郎については前に書いた。西行も英に対するローマン精神が濃厚であった。だからこそ、月と花の詠が多いのである。

こうして考えてゆくと、西行と光太郎とは、相通じるものが多い。光太郎には、西行を私淑した芭蕉については詩も文も書いている。「旅にやんで」の十二行の詩も、「芭蕉寸言」もある。「東洋的新次元」にも「芭蕉は旅せずにはゐられなかつた。」と芭蕉にふれて書いている。しかし西行についての詩は見当らない。にもかかわらず、西行の系譜に属しているといつてよきように思われる。生活の歌、*生*の詩を作った点において。

「西行の実生活について知られている事実は極めて少ないが、彼の歌の姿がそのまま彼の生活の姿だったに相違ないとは、誰にも容易に考えられるところだ。天稟の倫理性と人生無常に関する沈痛な信念とを心中深く蔵して、凝滞を知らず、頓悟を知らず、俗にも僧にも囚われぬ、自在で而も過たぬ、一種の生活法の体得者だったに違いないと思う。」と小林秀雄は書く。私も全くそう思う。物のわかつた自由人だったと思う。光太郎も同様に何にも束縛されぬ自由人であり、物が見えていた。戦時下の詩についても、あの時、あの状況に置かれては、大衆とともである情報下では、物が見えていなかったとはいきれない。物が見え、真実を書くから、いや味が無い。

吉田 ぼくは「淫心」で詩、好きなんです。あれはいい詩ですよ。

草野 ああいうことがらをあのようになかたちで表現したというのは、やはり

高村さんがはじめてだなあ。

吉田 あれはやっぱり、精神が清潔でノールだから歌えるということが言えますね。ちっともいや味がないですもの。

草野 だから高村さんの場合は「淫心」みたいな傾向の詩を書くことは、ごく自然なんだな。ちっとも淫心じゃないんだ。ごく当り前のこととして書いているわけだ。(座談会「光太郎の人間像」)

清潔でノールな精神で真実を書くから、ごく当り前のことになり、いやらしくなくなるのである。

西行の歌をもう少しあげよう

何事にとまる心のありければ更にしもまた世のいとほしき

花にそむ心はいかで残りけん捨てはてきてと思ふわが身に

行くへなく月に心の澄みすみてはてはいかにかならんとすらん

花みればそのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりける

いづくにか眠りねむりて倒れ臥さんと思ふかなしき道芝の露

ともすれば月澄む空にあくがるる心のはてを知るよしもがな

西行の心がいきいきと追ってくるし、人間像が浮かんでくる。

詩人

いくら目隠をされても己は向く方へ向く。

いくら廻されても針は天極をさす。

首の座

麻の実をつつく山雀を見ながら、

私は今山雀を彫つてゐる。

これが出来上ると木で彫つた山雀が

あの晴れた冬空に飛んでゆくのだ。

その不思議をこの世に生むのが

私の首をかけての地上の仕事だ。

そんな不思議が何になると、

幾世紀の血を浴びた、君、忍辱の友よ、

君の巨大な不可抗の手をさしのべるか。

おお呑み難い親愛の友よ、

君はむしろ私を二つに引裂け。

このささやかな創造の技は

今私の全存在を要求する。

この山雀が翼をひろげて空を飛ぶまで

首の座に私は坐つて天日に答へるのだ。

詩人として、彫刻家としての面目躍如である。

「生活人としての歌人、詩人の系譜」を、西行と光太郎に見たのであるが、どうであろうか。